

エッセイ

「命について」

(有)藤川組 代表取締役 ふじかわ ひでのり 藤川 英典



住 所: 加古川市平岡町新在家
2丁目272-8
T E L: 078-944-3405
営業内容: 建設業、不動産業



最近、命についてよく考えるようになった。歳のせいなのか、大切な命との別れが続いたからなのか。
今年の四月、十六年共に過ごしてきた愛犬が、虹の橋を渡って逝ってしまった。名前は「モカ」ポメラニアンの子だった。
平成二十年に奈良のブリーダーさんから譲ってもらった仔犬のころから賢く、お手、お座りは当たり前、犬にとっては難しい「待て」も出来るようになった。本当に愛らしく、我が家のアイドルだった。

「虹の橋を渡る」は、どうしても愛犬の死を受け入れられない妻が、唯一呑み込めた言葉だった。死んでしまったなんて耐えられない。せめて虹の橋を渡って、幸せなところに行ってほしい、そんな願いがあったのかも知れない。
八月には、十七年実家で母と共に暮らしたコロナちゃんが逝った。
「私とコロナとどっちが早いかねえ。せめてこの子が逝くのを送ってやりたい」

そう言っていた齢八十八の母の願いは届き、八月の暑い頃の早朝、コロナの往生を見送った。

今年五十四歳になった私も、先輩、同級生、後輩までもの訃報が届くようになり、更に死について考えることが増えた。今ある幸せな瞬間、何気ない日常。きっと明日もこんな日が来ると信じて疑われない生活を送っている事に気づかされる。

「最後だとわかっていたなら」

9月11日同時多発テロの追悼集会で読まれた詩であり、全世界で話題になったという。私はその話題に乗ったわけではなくこの詩に出会い、今ある平凡な日常のなんと有難いことを認識した。思い返せば、一歩間違えばそんな些細な幸せを失っていたかも知れない

別れ目ともいえる瞬間も多々あったな、と思い出される。家に帰れば当たり前妻が夕飯を用意して鼻歌を歌っている。そんなことも、沢山の奇跡の連続の結果だと、あの詩と出会った後ならわかる。

今、世界では戦争や紛争で、まるで統計の数のように読み流される程の命が失われている。とはいえ、銃弾にさらされることもなく、飢えと渇きに苦しむことも考えにくいこの平和な国日本でも、毎年沢山の命が失われている。そのようなニュースに触れる度に、やりきれない思いが沸いてくる。

どうか全ての命が自分の人生を、生きる権利を侵害されず、モカちゃんのようにコロナちゃんのように安らかに惜しまれ哀しまれながらも、全うして虹の橋を渡ることが出来るよう、心から祈りたい。



藤川家のアイドルだったモカちゃん